

東讃教区連合仏教婦人会初参り



一月七〜九日、真宗興正派東讃教区連合仏教婦人会のみなさまが、毎年恒例の初参りに本年は当山を参拝くださいました。しかも三日間でなんと四百五十名です。



朝九時に続々と山門をくぐって当山へ、本堂は連日満堂となりました。まず重誓偈をお勤めし、東讃教区教務所長・佐々木安德氏よりごあいさつ。昨年口にした言葉は「暑いなあ、寒いなあ、早いなあ、ここが痛いあそこが痛い」くらいではなかったか。良い言葉を口にかけていかなければならない、それは念仏である。念仏とは仏に念ぜられてからこそ私の口から出てくる感謝の言葉。有難うも念仏である、周りに支えていただいているからこそ口から出てくる。昔は日を拝み、毎日何事に

も感謝し手を合わす姿があった。念仏を子や孫に伝えることが大切である、とのお話をいただきました。



うにと願いながらも家族の喧嘩ひとつ無くせないのが私たち。この初参りを、そういう私を清らかな浄土へと導くべく願いを立ててくださいている阿弥陀如来の私心なき「願」、決して壊れることのない「金剛心」をいただくご縁とさせていただきます。また、当山と山門（旧観音寺城門）の由緒を紹介させていただきました。



続いて前任職からは、龍谷大学時代の寮生活でよき人との縁をいただき育てられた。その中で『歎異抄』の言葉に出会い、人間のすることはそらごとたわごとまことあることなし、我がはからいを交えないただ念仏のみがまことである、と胸に刻んで歩んできた。親が何の見返りもなく子を育てることのみが仏心に近いものである。阿弥陀如来は親子である私たちをお育てくださっているのであるから、ただ念仏ひとつをいただき精一杯楽しく人生を生き抜きましょう、との話があり、最後に思い出深い真宗宗歌「ふかきみ法（のり）にあいま

つる 身の幸（さち）なににたとうべき ひたすら道をききひらき まことのみ旨（むね）を歌い上げました。

婦人会の方々の合掌する姿が尊く、心が洗われたようです。清々しく今年を始められたことに感謝しつつ三日間を終えました。

これほど大勢のお参りがあったのはいつ以来かと前住職と昔を懐かしみました。昔は、お寺は勉強・遊びの場で多くの人が集まり、法要も賑わっていたそうです。お爺さんお婆さん、お父さんお母さんが子や孫を連れて家族でお参りされることも常であったと聞きますが、だんだんとそういう姿が見られなくなってきました。子供はお寺に参ったらお菓子ももらえると喜んでついてきたそうです。現代は様々な娯楽や文化施設も増え、仕事や子育ても以前より忙しくなったと言われ、お参りが減少する理由は多々あげられますが、お寺が時代の変化についていけていないことも一因かもしれません。仏教が人生を歩む上で力となることをどのような形で伝えていくことができるのか、また、お寺を魅力ある場所とするべく工夫していかねばならないと感じます。みなさまも良いアイデアがあればご教示お願いいたします。

仏教講演会講師・釈徹宗氏の「紹介」



五月十四日十三時半〜綾歌アイレックスで開催される仏教講演会、講師の釈徹宗氏はメディアにも度々登場しています。書籍でいえば数多くの専門書がありますが、一般書としては有名ジャーナリスト池上彰氏との対談（『池上彰の宗



教が分かれば世界が見える』（文春新書）にもありますし、テレビでいえば、NHK・Eテレ「こころの時代」かわり合う場の中で」にも出演されました。その内容を少し紹介します。

「宗教というのは、お前の生き方はそれでいいのかと突き付けてくるわけですね。真剣に聞かないとそういう風にならない……生きるとはどういうことか、なぜ生まれてきたのかとか真面目に向き合えばどつと出てくる問いがどんどん突き付けられて苦しくなりますよね。宗教というのはやっぱり自分というものがどこかでポキッと折られるというところがないと本当のところはわからない……」

「アメリカの文化人類学者ジョン・ネルソン氏が当初、お寺に行っても仏教が分からないとおっしゃったが、年月を経て数多くのお寺を回ったのちに、日本仏教の一番良いところは関係性の場を持っているところですね、とおっしゃられた。その場に身を置くことによって、劇的にバアーンと仏教が分かったり、信心に大きく転換するわけではないけれども、そこにずっと関わり続けることによってだんだん仏教的な感性が熟成されていくような、そういう場所なんじゃないか、という意味だと思っんです……」

「仏教は縁起の教え。あらゆるものが関わり合っている、この瞬間、この場に一時的に成り立っている存在。それが分かると苦しい人生を生き抜ける、死んでいける力になると思っんです……」

「他人に我が身をゆだねるのは覚悟が必要ですが、現代人のテーマだと思っ。自分のためだけに生きるのはつらい。人のために洗濯したり料理を作ったり、人のためにというのは人間の根本的

な喜びであって、生きる力に関わってくるものだと思う……」

「南無阿弥陀仏は「この世界に満ち満ちる、限りない光と限りないいのちの仏さまにおまかせして生き抜きます」という、自分の生きる姿勢を表わす言葉になります。自分の生きる姿勢を口にして人生を歩む「信仰告白」は、世界の多くの宗教で見られます。私は人類学的に見ても、とても重要な行為だと思っています……」

断片的な紹介ですが、分かりやすい語り口で仏教の心を語ってくださいと思いますので、遠方ですが是非ご来場ください。

ドラマ「とんび」のセリフから

NHKで放送され、現在TBSでも放送されている「とんび」ですが、一昔前の温かい家族と人々の絆を描いた、重松清原作のドラマです。主人公・旭（あきら）は幼い時にお母さんが自分をかばって死んでしまいます。そこで、お母さんはどこにいったのかと海雲和尚に尋ねます。

和尚 「死ぬってというのは別のお家に行く

ことだってえらい人は言うとする
けどな」

あきら 「どこにあるのそのお家？」

和尚 「どこかにあるんだけどどこにある

かは分からないんだ」

あきら 「見つけた人いないの？」



和尚 「もちろんいるさ。けどな、人によって住んでるところ

が違うのがややこしいところだな。ほら、あきらの住んでるお家と和尚の住んでるお家は違うだろ。この辺に居る人もいれば空の向こうにいる人も、お墓に住んでる人もいるんだ。海や山に住んでる人もいる」

あきら 「じゃあ、僕探す。お母さんのお家」

和尚 「うん、見つけたら教えてくれ」

あきら 「うん」

(数日後)

父(ヤス) 「見つけたぞ、あきら。お母さん

のお家。お母さんはここにいます。

お前の中にいる。お母さんはここ

にいます」

(しばらくして)

あきら 「和尚さま。お母さんの家あったよ」

和尚 「おっ、どこにあった？」

あきら 「(胸に手を当てて) ここ」

和尚 「ここか、じゃあずっと一緒だな」

あきら 「うん」

私たちは純粋な子供の問いに答えられるでしょうか。何でも分かったように済ませていないでしょうか、それで安心できるのか心もとなく感じます。親鸞聖人は「浄土真宗」、浄土の真実を宗とする生き方を説かれました。すなわち、仏の教えを、真実を教えてください。私たちが受け取っておられます。私たちが子供と一緒に、お父さんお母さんの行き先を考えられるように、答えられるようになりたいものです。



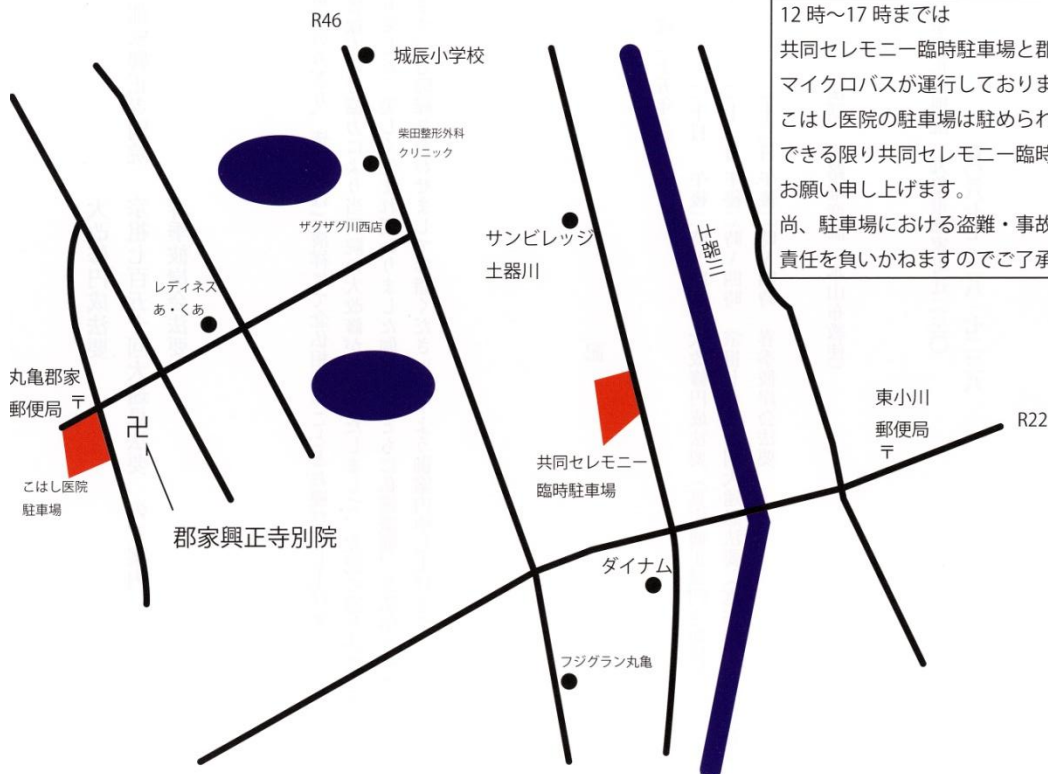
郡家興正寺別院法要のご案内

当山は真宗興正派という宗派、地域としては西讃教区に属しています。その西讃教区に本山興正寺の別院である郡家興正寺別院（丸亀市郡家町辻二三〇）があり、教区内七十二カ寺の事務を取る教務所もあります。現在、西讃教区教務所長、郡家興正寺別院大改修委員会委員長の職に就いており、改修事業に関わらせていただいております。その改修が各寺院、門信徒みなさまのご協力により完成し、三月二十、二十一日両日十四時から、大改修円成法要、宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌法要を厳修する運びとなりました。遠方ですが、お参りくださいますようご案内申し上げます。



（綾歌町栗熊福成寺の寒桜とメジロ）

郡家興正寺別院臨時駐車場案内図



12時～17時までは
共同セレモニー臨時駐車場と郡家興正寺別院の間を
マイクロバスが運行しております。
こはし医院の駐車場は駐められる台数に限りがございますので、
できる限り共同セレモニー臨時駐車場をご利用頂きますようお願い申し上げます。
尚、駐車場における盗難・事故等のトラブルにつきましては責任を負いかねますのでご了承下さい。